

## コラム 8 “3人寄れば責任の穴”

主にCHS（コンパクトヘリカルシステム、実験期間：1988年4月～2006年8月31日）での経験を踏まえ、安全に関して気が付いたことを述べます。

○CHSでは、実験を行う側と安全規制を行う側とが、十分に分化されておらず、一人二役の場合もありました。例えば、放射線取扱主任者、高圧ガス取扱責任者、電気装置責任者、等を実験グループのメンバーが兼任。多くの研究機関でもスタッフの数に余裕はなく同じような状況だろうと思います。どうしても軸足が実験遂行に傾きますので、安全面がおろそかになり勝ちです。これを避け、安全の意識を高めるためには、安全マニュアルを作り、新人は勿論のこと、スタッフにも読んでもらって、理解したかどうかテストを行うとよいでしょう。私自身も、京大ヘリオトロンの客員になった時、「テスト」を受けさせられました。テストを受けるとなると勉強し、安全に対する自覚が高まり

ます。

○安全の落とし穴として、最も重要なことと考えているのが、責任者が決まらないまま事態が進行することです。或るシステム（例えば、真空排気系）を誰か（責任者）が作り上げます。その人が定年や所属替えになると、誰かが後を引き継ぐこととなります。その時、責任者を決めないまま2人ないし3人の関係者が口や手を出して運転しているとトラブルの元になります。往々にして、インターロックが殺されていたり、前任者しか知らないノウハウがあったりします。引き継ぐ場合、新しい責任者は、完全に理解して自分のものにするか、或いは廃棄して自分で作り直すか、どちらかを選択すべきです。CHSでは、責任者をはっきりさせるために、名前と内線番号を記入したシールをすべての機器に貼付しました。

（松岡啓介、核融合科学研究所）



まつ おか けい すけ  
松岡啓介

1947年生まれ。2010年に核融合科学研究所（NIFS）を定年退職。NIFS名誉教授、総研大名誉教授。定年後は、九州大学応用力学研究所に特任教授として3年半お世話になりました。2013年10月にNIFSにUniversity Research Administrator (URA)なる職制が出来たのを機に研究力強化戦略室が発足しましたので、特任教授としてそこに所属。古巣で再びお世話になっており、研究者の方々の支援をしています。